
二振りの刀

五月晴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二振りの刀

【Nコード】

N1612I

【作者名】

五月晴

【あらすじ】

ある世界の日本で暮らしていた一刀と晴人の義兄弟は、ある日土倉から続くトンネルをくぐってとある異世界へと迷い込む。戦いに巻き込まれ、周りに流されていく2人と彼らを導く二振りの剣。

2人は無事に元の世界に帰ることが出来るのか。

序章（前書き）

これは真・恋姫無双の二次創作ものです。

史実の三国志と恋姫無双の内容をいじります。

原作とかなり掛け離れるため読む際には気をつけて下さい。

拙い文章と構成ですが、こういうのもアリかなと思われた方は感想を。

それでは二振りの刀を宜しくお願いします。

序章

恋姫無双 - 二振りの刀 -

序章

元服祝いに刀をくれると言った爺さんの言葉を頼りに、俺は義兄と共に祝い品を埃の積もった土倉を探索していた。

猿や河童の木乃伊や縄文やら弥生だか分からない土器、英国らへんの騎士甲冑に日本の鎧、馬につける鐙があると思えば古い着物や書物が散乱してあるところをみると…

「物置つていうより、ただ投げ入れたって感じだな」

「ははは…」

腹違いの兄の晴人は俺にとって双子の兄弟のような関係になっている。俺は敬愛を籠めて『ハル兄』と呼んでいる。

まあ、彼の母親が俺の母の妹で父親が俺の父だと分かった時の父母姉妹戦争はトラウマだ。

昔の名残を現在も残す国だし、妾に子どもを産ませるといふのはある。けれども姉妹に手を出すのかと幼いながら子ども2人で同調した10歳の夏だった。

「目的のものは何処にあるんだよ。一刀」

「爺さんの話だと、入り口らへんから奥に向かってぶん投げたっていう…」

「あの爺、渡すつもり皆無か」

晴人が其処にあった机らしきものを叩くと、雪崩が起こったときに鳴りそうな、地響きを鳴らすような音が倉全体を鳴らす。

「ハル兄〜」

一刀が恨めしそくに声を出すと

「あ〜…すまん」

晴人は頬を掻きながら苦笑いして答えた。
そのとき北郷家の庭の一部で地震が発生した。

誇り塗れとなった服を払いつつ俺は立ち上がった。

「ケホツ…あ〜…ハル兄。無事？」

問い掛けて待つこと30秒、返事がない。まだ埋もれているのかもしれない。
掘ろうかと迷っていると、積み重ねられていた荷を押しつけて立ち上がる影。

「自業自得だね、ハル兄」

「元はといえば爺のせいだ」

晴人は力任せに壁を叩く。

すると壁に亀裂が入り、輝は壁の面全体に広がっていく。

「これは洒落になんないよ…」

この日2度目の地震は……起きなかった。

倉が崩れると覚悟を決めた俺たちを嘲笑うかのように現れたトンネル。何か霊的なものが出そうな気がしてならない、かなり年季が入ったものだった。

「『虎穴に入らずんば虎子を得ず』っていつし行ってみる？ハル兄…って、もう入っているし！」

俺はトンネルの中に入って義兄の後を追う。湿気によるべたつきとカビのなんとも言えない臭いに負けることなく進み続けると、晴人が上から釣り下がった縄を見て固まっていた。

「なにやってんの？」

晴人が指差す方向には、『引いちゃ、イヤン』と書かれた紙が貼ってあった。

「イヤン…って」

「爺に嵌められている気がして、俺は引くの…なんかやだ」

仕方なく俺が縄を握る。視線を交わすと兄は頷いた。そして上を見て、縄を引くと…

『パカッ』

立っていた場所が開き、俺と義兄は落ちた。ええ、真っ逆さまに…

「あの糞爺~~~~」

「上と思わせて、下か~~~~」

どのくらい時間が経ったのか俺には判らなかつた。
ただ随分と長く寝ていたようだった。

俺が目を開き真っ先に目に入ったのは、一振りの刀。

手に取ると周囲の様子が目に映り、脳に情報として伝達された。

周囲の人間の視線が俺に向けられる。

特に黄色い布を巻いた男達を相手に戦っていた少女たちは瞳を丸くしている。

「空からお兄ちゃんが降ってきたのだ」

「そんな馬鹿な…」

俺が立っているのはどうやら戦場のど真ん中らしい…

続く

序章（後書き）

いかがでしたでしょうか。
文はこれから長くして行くつもりです。
では。

予告

突然沸いて出た一刀に不信を持ちながらも協力を要請する少女たち。

一刀はその刀に秘められた力を戦場に轟かせる。

次回 「恋姫無双 - 二振りの刀」 第1章

「桃園の誓い」

あれ？ハル兄は何処？

一章

恋姫無双 - 二振りの刀 -

1章 「桃園の誓いのこと」

「東方から来る流星は、乱世を治める使者の乗り物…やっぱり、管輅ちゃんの占いは本当だったんだ」

街中で子どもや女性、老人たちに指揮を出していた少女は戦場に落ちた流星を見ながら呟いた。

- 乱世に平和を誘う天の使者 - 自称大陸一の占い師・管輅の言葉である。

態々戦場に舞い降りたのだ。きっと戦いを沈めてくれるだろう。

少女はそう思い天の使者の元に向かおうと走り出し…

「むぎゅっ

」

上から落ちてきた何かに押し潰された。

その場にいた人たちは皆武器を構えたまま一刀を見て固まっていた。一刀は落ち着いて状況を確認する。

「（今、自分がいるのは広大な荒野で練り広げられているだろう戦場のど真ん中。町を護る町民に助っ人として少女が2人混ざっている軍と黄色い布を身体どこかに巻いた軍の戦い。自分の服装はなぜか学院の制服。正装する時につける金の装飾品までついている。左手には濃い紅色の鞘を持つ…恐らく刀を所持している。）」

一刀を見ていた人たちは次々に動揺の声をあげていく。

「あゝ…えつとお」

一刀は近くにいた男に声を掛けるが、

<右斜め後ろより男が斬りかかってくるぞ>

頭に直接響いた男の声に反応した一刀はすぐに前転した。自分がいた場所に振り下ろされる大上段からの袈裟切り。

「危なっ！当たったらどうするんだ」

<ふふふ。おかしなことを言う主だ。ここは戦場、主はどちらにも所属しない異端。攻撃されて当たり前だ…状況から見て町民の味方をするのが一番効率よいな>

「お前は誰なんだ？」

一刀は首を左右に向け声の主を探す。

<そんなことはどうでもよい。先に動かなければ町民たちからも攻撃を受けるぞ？主>

一刀は前を見据える。戸惑いを見せる町民の兵たちと少女、先程まで動揺を見せていた黄色い布を巻いた男達はそれぞれ武器を構えてこちらを見ている。

<ひとつ名乗り出てはいかがかな？主>

一刀は頭に直接響く男の声を振り払うように、左右に大きく頭を振り左手で握り締めた紅色の鞘に納められた刀を引き抜く。その刀の刀身は、まるで鮮血をそのまま刃にしたような色をしていた。

「北郷一刀…罷り通る！」

<くくく。主よ、少々くすぐつたいぞ>

疑問を口にする前に一刀は自分の身体に違和感を覚えた。

だが、自分の姿を確認することは一刀には出来ない。周りの人の反応を見ようと思ったのだが、黄色い布を巻いた男達は腰を抜かし、町民たちは何故か一刀を拝んでいる。少女達も口を空けて呆けていた。

「お前は誰？」

<我か？我はアンシャル・阿蘇羅…色んな名を持つがお前の国ではこう呼ばれる。』阿修羅』とな>

「…神さま？」

<今は主の持つ刀だな>

一刀は思わず手を刀から離しそうになるが何とか止まることが出来た。

<主よ。我が言霊の後に続けて言葉を発せよ>

「へっ？」

一刀が何をする気なのかを問いただそうとする前に言霊を紡ぐ阿修羅。一刀は慌ててそれに続く。

< 焔の御掌 >

「ほむらのみしょう」

< 災いを灰塵と化せ >

「わざわざをかいじんとかせ」

< 爆せよ >

「ばくせよ…って」

一刀は自分の発した言葉に恐怖を覚えた。そして一刀の恐怖は現実のものとなり、一刀の周りにいた黄色い布を巻いた男達から灼熱の炎に包まれる。

おぞましい程の悲鳴が一瞬だけ聞こえ、残りは…

< 我が創りだす炎の最大温度は摂氏1800度。超高温の発火ガスは口鼻に入り気管全てを焼き尽くす。故に声はでない。この地上から身体が消え去り、魂が地獄に逝くまで燃え続ける。まさに地獄の業火よ >

「…それを俺の身体を使ってしないでくれよ」

< やってしまったからには仕方が無かるう？ >

一刀は阿修羅がとり憑いた刀…略して『阿修羅刀』を鞘に納めてがつくりと頂垂れた。

神さまがなにやら慰めの言葉を紡いでいるが聞こえていない。炎が収束し町民が集まってきたが、一刀は阿修羅を手にして人を殺したという現実を自覚し色々思考する内に気絶していた。

一刀が目を覚ますと自分の身体の上に花びらが乗っているのが見えた。

それをつまんで眺めていると声を掛けられた。

「起きられたのですね」

その少女は見覚えがあった。一刀が立ったあの戦場で町民を率いて戦っていた2人の少女の内の1人だ。

「ここは？」

一刀は立ち上がり伸びをしながら黒髪の少女に尋ねる。

「はい。北郷さまに救っていただいたあの町から少し離れたところにある桃園です。お兄さまもあちらに」

少女に言われてその方角を見ると義兄が赤い髪の少女を肩車して桃を取ろうとしていて…

「こおらああ！鈴々！朝倉さま！」

「やっべ」

「愛紗が怒ったのだー」

黒髪の少女は2人の方へ槍を振り回しながら駆けて行った。朝倉という苗字で呼ばれた義兄と鈴々と呼ばれた少女は木を巧く使いながら逃げる。

苦笑いしながら眺めていると桃色の髪を持った少女が一刀の方へ歩みを進めて来た。

一刀が軽く会釈すると少女はにこやかに微笑んでお辞儀して言葉を紡ぐ。

「天から来たばかりだったのに力を貸してくれてありがとうございます」

「いや…俺は…」

満面の笑みを向ける少女から顔を背けるように桃の木の花を見る一刀。

一刀の頭の中では阿修羅の業火に包まれた瞬間の男達の叫びが繰り返し聞こえていた。

少女は一刀の隣に立ち同じ目線で物を見る。

「私たちは弱い人たちが傷つき、無念を抱いて倒れることに我慢できなくて、少しでも力になれるのならって、そう思って今まで旅をしてきました」

少女が語りだした言葉に視線をそのままに耳を傾ける一刀。

「でも……私と愛紗ちゃんと鈴々ちゃんの3人ではもう、何の力に

もなれない。そんな時代になってきている」

少女は自信なく俯く。一刀はそれを横目にひらひらと舞い落ちる桃の花びらを掌に掴んだ。

「官匪の横行、太守の暴政……そして弱い人間が群れをなし、更に弱い人間を叩く。そういった負の連鎖が大陸を覆いつくそうとしているの」

「あの黄色い布を巻いた人間達もそう？」

一刀が尋ねるとコクリと頷く少女。

「…うん」

少女は肩を震わせる。一刀は思わず声を掛けようと少女の真正面に立ったが、顔を上げた少女の強い眼差しを見た。

「でも、そんなことで挫けたくないんです。無力な私たちにだって、何か出来ることはあるはずです。……だから、北郷さん」

少女は一呼吸置いてお辞儀しながら言い切る。

「私たちに力を貸してください！」

一刀は戸惑い周りを見ようと少女から目を逸らす。すると黒髪の少女と赤い髪の少女が桃色の髪の少女の後ろで同じように頭を下げていた。義兄は一刀を見て視線を合わせると力強く頷いた。

一刀は物言わぬ阿修羅刀を左手で握り締め、不安そうに顔を上げた少女に答えるように言葉を紡ぐ。

「俺や晴人は、君達が思っているよりも強くない。ただ少しだけ人とは違った能力を持っているくらいの人間だ。正直、大陸全土を救うなんてことは出来ないと思う…けど、自分が大切だと思う人、家族や恋人、仲間や友人、ホンの一握りの人間を護るくらいしか戦えないだろうけど、1人ひとりがそんな風に考えていけるようになれば俺たちじゃなくても世界は変えられるはずだと思うんだ。俺がどこまで君達の力になれるか分からないけれど、こんな考えを持つ俺でよかつたら力を貸すよ」

「北郷さん…ありがとうございます」

少女が一刀の手をしっかりと握り締める。

その瞳はただただまっすぐで、握り締められた手から少女の熱き魂が焔のように伝わってくる。

<中々見かけることの出来ない素晴らしき魂だな。主よ>

「俺もそう思うよ」

「なんですか？北郷さん」

「えっ…あついや…なんでもないよ」

しどろもどろとなった一刀を見て赤い髪の少女が呟く。

「お兄ちゃん、おかしいのだ」

桃色の髪の少女を皮切りにくすりと笑いが零れた。

後ろの方で見ていた義兄が横に来て語りかけてきた。

「いいんだな」

「決めたよ。それに後押ししたのはハル兄じゃないか」

「……そうだな。改めて自己紹介しようか、俺は朝倉晴人」

「俺は北郷一刀」

義兄が腰に差していた蒼色の鞘に入った刀を天に掲げ名乗りを挙げたので、一刀も阿修羅刀を掲げ名乗り挙げる。

「私は劉備」

桃色の髪の少女が宝剣を掲げて名乗り。

「私は関羽です」

黒髪の少女が槍を掲げて名乗りを挙げ。

「鈴々は張飛なのだ」

赤い髪の少女が矛を腕一杯に掲げて名乗りを挙げる。

一刀は3人の名前を聞いて頭を大槌で叩かれたような衝撃を受けた。そして…

「……われ「ストップ！止まって！止めてくれ！」……お兄ちゃん空気を読んで欲しいのだ」

一刀は3人に謝り、義兄を連れて少女たちから離れる。

「なんだ？」

義兄はニヤニヤと笑いながら一刀を見ている。

「確信犯か！？そうなのか！？」

一刀は怒りを彷彿させ身体をワナワナと震わせる。

「男に二言はない…な」

一刀はその場につくりと頂垂れた。まさか自分があのような場面に出くわしているなどは夢にも思っておらず、義兄は愉しみながら自分の行動と言動を観察していたということに軽く衝撃を受けた。もちろん前者が大きいのだが…。

「3人が不思議がつているし戻るぞ。…：それから、俺たちは天の御遣いとやらになるらしいから、そんな無様な格好は俺たちだけのときにしろよ、一刀」

一刀はジト目で義兄を見ながら呟いた。

「ハル兄が悪魔に見える」

「言っている」

義兄は軽く流して3人の元へ戻っていった。

一刀は先程から握り締めたままだった花びらを地面に落とす。かなりの力で握り締めていたようで匂いが掌に移っている。

<面白いな、『毘沙門天』の主は>

「何？ハル兄にも神さまが憑いているわけ？」

<主よ、心配するな。塞翁が馬というではないか>

「使い方、間違っているって分かって言っている？」

一刀は阿修羅と軽く会話しながら4人の元に向かった。

「では、改めて結盟を」

劉備の言葉に一刀・晴人・関羽・張飛の4人が頷き、関羽がその手に持った杯を空に向かって高々と掲げる。

「我ら5人っ！」

「姓は違えども、兄弟きょうだい妹の契りを結びしからは！」

「心を同じくして助け合い、みんなで力無き人々を救うのだ！」

「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも！」

「願わくば同年、同月、同日に死せんことを！」

「…乾杯」

世に有名な桃園の誓い。

それが異世界からの来訪者である一刀と晴人の2人の前で繰り広げられている。

その『事』の意味を胸に刻み、一刀と晴人の2人は戦乱に満ちた歴史の中に一歩、足を踏み出した…。

続く

一章（後書き）

トンネルくぐれば異世界へ…って一章はこれで終りです。少し文章を増やしました。ぼちぼち増やしていきます。では。

予告

阿修羅の一刀と毘沙門天の晴人

焰と氷の闘いは何を呼ぶのか。

次回 「恋姫無双 - 二振りの刀 -」 二章

「兄弟喧嘩のこと」

ちよっ!?!?こんな街中でお止め下さい、ご主人様!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1612i/>

二振りの刀

2010年10月10日17時31分発行